

「葛飾柴又の文化的景観」ニュース

帝釈天題経寺の文化財建造物調査

葛飾柴又の文化的景観保存・活用推進委員会委員

京都工芸繊維大学教授 清水 重敦（しみず じゅうとん）

「葛飾柴又の文化的景観」を形作る3つのリングの中心にあって、柴又らしさの大いなる源となっている題経寺。全国屈指の有名寺院であり、重要文化的景観の重要な構成要素にも特定されていますが、個々の建物は文化財に指定されてはいません。帝釈天をお祀りする帝釈堂が最終的に建設されたのが昭和4年（1929）と、寺社建築としては建設年代が比較的新しいため、これまでは指定文化財の対象として見られにくかったのでしょう。



平成23年から実施された柴又地区の文化的景観調査の中で、清水が担当して題経寺境内を建築学的な視点で調べた結果、驚くべきことが明らかとなりました。題経寺境内を描いた最も古い絵図である『新編武蔵風土記稿』（文化・文政期）に描かれた本堂と祖師堂が、形を変えながら今に残っているらしいこと、そして建物が一棟ずつ建て増される度に、古い建物が少しずつ改築、移築され、まるで生物が成長するかのよう境内を充実させていった様が見えてきたのです。



題経寺調査の様子

この度、文化的景観保存活用事業の一環として、題経寺境内の建造物群を文化財の視点から個々に詳細調査する事業が始まりました。さらなる詳細な調査により、個々の建造物の文化財指定を目指すとともに、文化的景観調査で見えてきた境内のダイナミックな変遷の分析をさらに磨き上げることを試みていきます。工学院大学初田香成准教授が全体をとりまとめ、清水は文化財に関する専門の立場から全体をアドバイスするとともに、帝釈堂、祖師堂、二天門の詳細調査を手がけています。

本調査では、建物ごとに詳細な図面を作成し、建物の形、間取り、技術、装飾の特徴あるいは建物に記された文字情報を記録し、また建物に刻まれた改造の痕跡から増改築の過程を推定するという作業を行っています。図面作成では寸法を手計りしていきませんが、3Dスキャナーを導入して実測を効率化する予定です。3Dスキャナーでは建物をまるごとスキャンすることができるので、そのデータを立体映像に用いることも考えています。建物の特徴の詳細調査では数々の発見があり、最近の調査では祖師堂の内殿と拝殿の各柱に寄進者の名前が記されていることがわかりました。ほぼ全ての柱に書かれており、信仰の篤さがうかがえます。

調査成果は令和4年度に報告書として取りまとめる予定です。題経寺境内、そして葛飾柴又の文化的景観の魅力をさらに増せるような成果が出せるよう努力して参りますので、ご期待下さい。

柴又の建物と植栽のある風景

葛飾柴又の文化的景観保存・活用推進委員会委員
木暮 隆一（きぐれ・りゅういち）

私は生まれてから現在まで柴又で暮らしてきました。元々は現在の江戸川河川敷の辺りに家がありましたが、江戸川の河川改修が行われていた昭和39年（1964）頃に今の場所に家を移しました。当時は昭和22年（1947）に発生したカスリーン台風の被害の記憶もありましたので、移転の際には敷地を盛り土して高さを上げ対策を行いました。盛り土をした一番高い場所は大体六尺（約1.8m）くらい上げましたが、幸運にもその後、カスリーン台風のような水害に遭うことはありませんでした。



曳家をして移転した納屋

敷地内に建てられている納屋も自宅を移転する際に曳家をして今の場所に移しています。この納屋を建てたのは昭和27年（1952）頃で、一般的な納屋とは異なり合掌組で丈夫な作りになっています。そのため普通曳家をするると多少の歪みが出て壁にヒビが入ることがあるのですが、そういったことも無く、今現在に至るまで補修が必要なことはありませんでした。

敷地内には、防火機能があるシイ、マキやマツといった眺めが良いと思う樹木を植えています。昔はこれらの樹木の手入れのため、自分で梯子を使って剪定を

行ったものですが、高い場所での作業になると危ないということもあって、今は植木屋さんに剪定をお願いしています。当たり前のことですが、植物は放っておくと成長するので日常的な手入れが必要です。特に生垣はそのままにすると幅が広がり、隣接する道にも影響が出てしまいます。また見栄えの部分でも定期的な手入れをすることは大切だと思います。

ただ、一方で木の剪定には費用はかかりますし、定期的な剪定を行うことは負担に感じる部分もあります。昔の柴又は土手に桜並木があったり、矢切の渡しの近くには水遊びができる場所がありましたが、今では無くなってしまい景色が変わってしまいました。私自身は、少し遠目から古くからある納屋や生垣などを見ると柴又らしい景色だと感じていますので、自分の代では気を配りながら維持管理を行っていきたいと考えています。ただ代替わりがあると、そういった物への考え方も変わってくると思いますので、柴又の景観を残していく場合はそこが課題になるのではないかと感じています。

柴又の景観を残すためには、次の世代にも柴又の風景や文化的景観として残したいものに愛着を感じてもらうことが大事だと思います。それには行政と地域の対話や地域コミュニティ内での交流も重要だと思いますし、重要な構成要素に関して維持管理の助成があったり、例えば「すぐやる課」の様な何かあった時にスピード感を持って動ける体制があると良いのではないかと思います。



敷地内に植えているゴヨウマツ

柴又の旧家－敬順と荷風が見た柴又－

葛飾区産業観光部観光課兼務郷土と天文の博物館 学芸員
谷口 榮（たにぐち・さかえ）

江戸時代、十方庵敬順^{じっぽうあん けいじゅん}が著した紀行文『遊歴雑記』に、当時の柴又の様子が書き留められています。敬順は、文化12年（1815）に四つ木の（渋江）西光寺や客人大権現^{まろうど だいごんげん}（渋江白髭神社）、立石明神（立石様）、柴又の帝釈天題経寺を訪れ、柴又の弥右衛門宅に宿泊した時の江戸川沿いの風景を記しているのです、その一部を抜き書きしてみましょう。

題経寺を立出てより途^{みち}すがら、弥右衛門が倅清七といえるものに出会し、（中略）折入て一宿をたのミたる也けり、扱此家の座敷^{ざせき}に葡萄^{ぶどう}匍^{はるか}して遙に川向ふを見れば、東北の方ハ松戸の駅、東南に出張たるハ国府の台、総寧寺の山とかや、総て東より西の方まで利根川の溶りに随ひて、渺茫と取はなしたる眺望ハ言語に絶し
（『遊歴雑記』 弐編之乾 五十六 下矢切の渡し場川添の眺望より抜粋、国立公文書館所蔵）

ここで注目したいのは、「座敷に葡萄匍して遙に川向ふを見れば」というところです。敬順は、座敷で腹ばいになって、川向こうの松戸宿から市川の国府台の景観を堪能しています。つまり、腹ばいになった母屋の配置は、東向きの屋敷構えでないと、『遊歴雑記』に記されたような景観を眺望することはできません。

なぜこの一文に注目したのかというと、一般的には屋敷構えは南向きなのですが、柴又の旧家を調べると、東向きの屋敷構えが多くみられるのが特徴だからです。『遊歴雑記』のおかげで、柴又の東向きの屋敷構えは少なくとも江戸時代の文化期まで遡ることが確認でき、柴又ならではの伝統的な構えであった可能性が考えられるのです。

では、なぜ東向きに屋敷を構えたのでしょうか。この問いについては、残念ながらまだ明確にはわかりませんが、キーワードは柴又の東を流れる「江戸川」にあるのかもしれませんが。柴又から見ると江戸や東京は西方に位置していますが、かつての柴又の玄関口は江戸川に求められ、川とともに生活が営まれていたからです。

もうひとつ柴又の旧家の様子を教えてくれる作品を紹介したいと思います。永井荷風の『断腸亭日乗』です。昭和7年（1932）2月1日、荷風は帝釈天題経寺を詣でた後、門前の道を北に曲って料理屋川甚に向かいます。この時、「此邊の人家いづれも槇の生垣を結び、庭には果樹を栽培」していると、記しています。現在でも旧家の境界装置として槇をめぐる生垣や、庭に柑橘系の果樹が植えられている様子が確認でき、それらは昔から変わらない旧家の姿だったことがわかります。

このように文学作品を紐解くことによって、柴又の伝統的な旧家の構えや風情がどのようなものであったか確認することができます。それらがいまだに失われることなく、現代に維持継承されていることが葛飾柴又の文化的景観の魅力にもなっているのです。



『嘉陵紀行 6』（117-1056） 国立公文書館所蔵

葛飾柴又の文化的景観整備計画の策定を進めています

現在整備計画策定に向けて、柴又の魅力や魅力を再認識するとともに、地域の課題や解決方法を検討するため、今年の夏にワークショップと住民アンケートを実施し、地域の皆様と意見交換を行いました。これには多くの方にご協力いただき、地域の皆様が感じている様々な柴又への思いやご意見をうかがうことができました。

ワークショップやアンケートを通じて、地域の皆様が感じている柴又の良いところや今後に残したいところ、普段生活で感じている課題や問題意識、葛飾柴又の文化的景観を守るための取り組みについて、地域の皆様がどう感じているのかを意見交換を行いました。

ここから参道の魅力や寺社のお祭りを通じた地域のつながり、江戸川やそこから見える眺めなどの様々な柴又の魅力や、地域の課題については、建物や生け垣などの維持管理の難しさや区へ気軽に相談できる窓口がないこと、文化的景観のPRが不足していることなどが挙げられました。

これらの課題を解決するため、様々な人が集まることができる会を設けること、建物や生け垣などの維持管理を行っていくために新たに補助制度を設けるなどの意見が挙がりました。文化的景観のPR不足については広報紙の発行、各種イベントの実施などの意見が出ました。

葛飾柴又の文化的景観を守っていくため、地域の皆様からいただいた意見を整備計画へ反映させるよう検討を進めています。この整備計画については、地元の皆様にもお示ししながら策定を進めていきたいと考えています。また、重要な構成要素所有者の方々にも同様に制度及び今後の取り組みなどの周知を検討しており、改めてご案内をします。



ワークショップの様子

ご注意ください

「葛飾柴又の文化的景観」の選定範囲内では、工事を行う際には届け出等が必要となる場合があります。

- 柴又まちなみ景観ガイドライン
 - ・帝釈天境内の景観、江戸川堤、柴又公園等（高台）からの眺望、参道から帝釈天への通景に関わる内容
- 葛飾区景観地区条例等
 - ・柴又地域景観地区内で建築物や工作物の新築、新設、外観の変更等を行う場合
- 重要文化的景観に係る選定及び届出等に関する規則
 - ・「葛飾柴又の文化的景観」の重要な構成要素の工事を行う場合

詳しくは下記の問い合わせ先までご連絡ください。

このチラシは、郷土と天文の博物館ウェブサイトでも公開しています。ウェブサイトでは、過去の発行号や、掲載しきれない情報なども掲載しております。インターネットの検索画面で検索していただくか、QRコードからもご覧いただけます。



柴又 文化的景観

検索

【このチラシに関するお問い合わせ】

葛飾区郷土と天文の博物館（文化的景観担当）

〒125-0063 葛飾区白鳥3-25-1

TEL 03-3838-1101

FAX 03-5680-0849

郷土と天文の博物館ウェブサイト

(<http://www.museum.city.katsushika.lg.jp>)